

「これぐらいの大きさの
パネルを付けられ、何誌発

上空から計測



ドイツ北西部にある人口約16万5000のオスナブリュックでは、太陽光発電パネル普及のため独自のシステムを活用している。上空から全住宅の屋根の大きさや傾斜を計測し、パネル設置の採算性の情報を市民に提供するとともに、熱を感知するカメラを使って、熱が多く逃げている住宅に断熱改修を促す。小規模な自治体でも導入可能なこの取り組みは、欧州で約1300の自治体に広がっている。(オスナブリュックで、垣見洋樹、写真も)

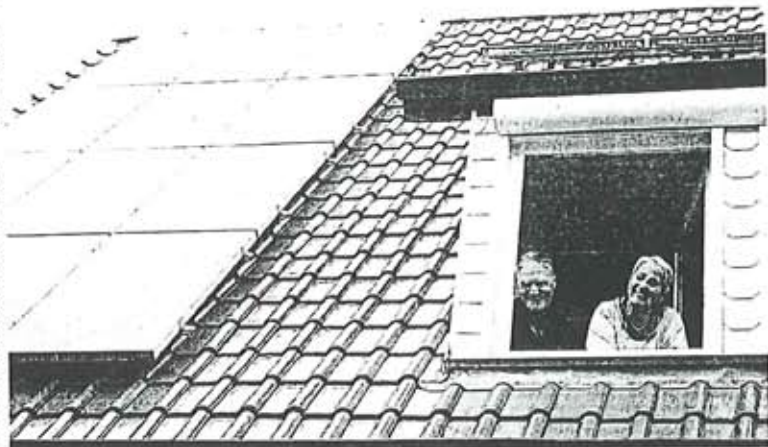
独・オスナブリュック市

「太陽光」普及へ 各戸の利益算出

電できるかが、一目で分かった。市内の消防署員、エックハルト・シュベルプリンクさん(左)は、二〇〇八年に市が開設したサイトを
を見た印象を語った。
サイトでは、各戸の屋根の状態や発電容量などが数

値や色で表示され、パネル設置のためローン借りる方法まで提示される。シュベルプリンクさん宅

の南側の屋根は、高価なパネルをつけても採算がとれると判明。さっそくローンを組み、一万五千円(約百



オスナブリュック市が提供した航空写真を見て、屋根に太陽光発電パネルを設置したシュベルプリンクさん夫妻

オスナブリュック市 ドイツ北西部ニーダーザクセン州第3の都市。主な産業は製紙、銅製品製造、自動車製造。1648年に三十年戦争終結のためウエストファリア条約が結ばれた地として知られる。環境保護と再生エネルギー導入に力を入れ、1992年から風力発電も進めている。

七十万円)、面積三十二平方メートルにシステムを開発し、発電容量四・二キロワットのパネルを設置した。固定価格買い取り制度によって二十年間は年千九百二十円(約二十二万円)の売電収入が保証される。最初の十年で設置費用を回収し、その後は純粋に利益を生む見込みだ。「大きな投資だったが、市の情報によってリスクを最小限にできた」と振り返る。

再生可能エネルギーへの転換に向け新たな方法を模索していた市は、地元の大学の研究者に呼び掛け、航空機からレーザーで地形図をつくる技術や太陽光発電の技術を組み合わせて「

「大都市ではないので、資金がない。情報を提供することで市民を巻き込みたかった」とアトレフ・ゲルツ市環境・気候保護部長(左)は話す。

一五年にはパネルの設置世帯が千を超えた。五〇年に全電力を再生可能エネルギーに切り替える目標を掲げる市は、約二万六千世帯への普及を目指す。

一方、一五年から全住宅の熱の出入りに関する情報も公開。三万五千人以上が閲覧し、約千三百人が断熱改修の相談に訪れた。今月二十四日には日本の環境省や神奈川県小田原市などの職員が現地を見学。世界各地から視察団が訪れている。

情報提供
欧州自治体に広がる